

## 2017年度賛助会員を募集しています

「協会」をささえていただくサポーターです。部落差別とは何か？どうしたらなくすることができるのか？関心や興味を呼び起こし、多様な意見交換を通じて刺激しあい、学びあい、問題意識が触発され、行動への契機が実る場を創り出すために、知恵と力をお貸しください。年4回発行予定の機関誌「じんけん ぶんか まちづくり」をお届けします（今までお届けしている方は、これまでどおりお届けします）。また、講座やイベントなどの案内をします。

- 年会費 1口・1000円です。下記の郵便振替口座に振り込んでください。  
口座名：とよなか人権文化まちづくり協会 口座番号：00960-8-153806

### 人権相談をご利用ください

#### 1. 人権ケースワーク事業（豊中市からの受託事業）

##### ●定例相談

とき：月曜・水曜・金曜日の9時～17時

ところ：蛸池事務所（蛸池人権まちづくりセンター内）

電話：06-6841-2315 mail：bpazk307@tcct.zaq.ne.jp

##### ●出張相談

とき：毎月第2・第4木曜日の13時～15時

ところ：豊中市役所第2庁舎1階市民相談課

#### 2. 人権相談（自主事業）

とき：月曜日～土曜日、事務所開設時（9時～17時）に随時受付

ところ：豊中事務所（豊中人権まちづくりセンター内）

電話：06-6841-5300 mail：bwz37306@nifty.com

##### ●編集：発行

一般財団法人

とよなか人権文化まちづくり協会

豊中市岡町北3-13-7 豊中人権まちづくりセンター内

TEL：06(6841)5300 FAX：06(6841)6655

HP：http://jinken.la.coocan.jp/

E MAIL：bwz37306@nifty.com 郵便振替：00960-8-153806

蛸池事務所 TEL:06(6841)2315 E MAIL:bpazk307@tcct.zaq.ne.jp

# じんけん ぶんか まちづくり

一般財団法人とよなか人権文化まちづくり協会

第57号（2017年10月）



もくじ

評議員のページ「施設コンフリクトにどう向き合うか？」……………3  
 報告①「山口賢次さんと宇和島差別殺傷事件」……………5  
 報告②「宇和島フィールドワークに参加して」……………8  
 監事のページ「身近な人に学ぶ」……………11  
 報告③「私たちの部落問題」……………15  
 理事のページ「景観論争の皮肉」……………17  
 楽遊ガイド「病気に打ち勝て！！阪神タイガース 横田慎太郎選手！！！」……………19  
 新聞切り抜き帖「小池東京都知事の追悼文取りやめはヘイトの容認である！」…21  
 豊中地域から「部落問題をきちんと知り、学ぶフィールドワークに取り組んで」…22  
 蛭池地域から「平和と人権月間では…」……………23  
 書評『『麒麟の子』ほか1冊』……………24  
 東北レポート「2017 東北夏旅『あれから6年半、被災地を歩く』」……………27  
 報告④「2018年は米騒動から100年」……………32  
 インフォメーション……………34  
 あとがき……………35

<p>表紙の写真「三王岩」</p> <p>◆田老の町はまだまだ復興は緒に就いたばかりで、新しい堤防工事も行われている。海沿いの道を山手の方に行くと、「製氷貯水施設」の建物があり、その壁には「明治の三陸津波」15.0 m、「昭和の三陸津波」10.0 m、「今回」17.3 mと、それぞれの津波の高さが表示されている。幾度も大津波に襲われているのだ。◆息を切らして坂道を登り、汗まみれになって到着したのは「三王園地・三王岩」。防潮堤の南東側、陸中海岸の景勝地に位置する。高さ50メートルの男岩を真ん中に左側が女岩、右側が太鼓岩と3つの巨岩が陸中海岸に並んでいる。1億1千年前（白亜紀）に堆積した地層でできているそうだが、長い年月をかけて、風に晒され、波に</p>	<p>洗われ、削り取られた自然の芸術だ。</p> <p>◆男岩の基礎部中央には、海水の作用で浸食された直径2 mほどの穴（海食洞）が貫通していて、干潮時には向こう側に通り抜けることができるという。海食洞をくぐり抜けると幸運が訪れると言われている。◆津波に破壊され、3月に復旧した遊歩道を下まで降りて、見上げるとこれまたデカイ、荘観だ。水平線の彼方まで見通せる絶好の日とで、コバルトブルーの海に聳え立っている。よく見ると、男岩はモアイ像によく似ている。津波にも負けなかったんだ、エライぞ！</p> <p>所在地：〒027-0322 岩手県宮古市田老字青砂里      アクセス：田老駅から徒歩で20分</p>
---	---

○あとがき○

◇今年度より評議員と監事を引き受けてくださった宮前さんと青木さん。ご紹介を兼ねて二人の写真を掲載させていただきました。3Pの写真は、豊中で現在建設中の施設の近隣に掲げられている看板です。初めて見た時は唖然としました。子どもたちが自ら手を挙げて施設で暮らすことを望んだ訳ではない。心の狭い大人とは真逆の宮前さんの行動力に脱帽です◇豊中の生き字引といっても過言ではないはず。食にも酒にもこだわる溝口さんは長年、豊中市同和事業促進協議会の事務局長でした。「ちょっと東京まで絵、観に行ってくるわ」と余生を楽しんでおられますが、地域の高齢化が進むなか、歴史を知る貴重な存在なので、しっかりと聞き取りをしておかなければいけません。◇今号は原稿を3本も担当した重本さん。鬼編集長とされていてまいそうですが、指示を出したのは私ではなく事務局長です。豊中地域のフィールドワークは彼の担当。普段は話す側の人で聞く側になるのも新鮮味があったはず。自身のフィードバックやスキルアップにも繋がったのではと思います◇青木さんと初めてお会いしたのは第五中学校で校長先生をなさっているときだった。日々、自転車で市内を走り回り、講座がある日は驚くような距離を歩いてセンターまで来てくださる。車しか乗らない私は見習わなければいけない◇阪神大震災で実家が被災した。我が家と隣家の境目に立てていたセメント壁が隣家側に

倒れた。隣のおじさんはずっと壁の心配ばかりしていた。近所のアパートが倒壊し、1階に住んでいた女性が下敷きになり、皆が救助にあたっていてもずっと傷ついた壁の心配をしていた。高校生ながら「こんな大人には絶対なりたくない」と思ったが、何かあったとき、そんな大人でも助けることができる人間でありたいと大人になった今、思う◇広島カープの強さが群を抜いている。若い選手の活躍が著しい。チームの勢いがいまいちだった阪神タイガースがなんとか2位でペナントレースを終えられそうなのも玉置さんがチームの応援ではなく、選手の観察に尽力してくださったおかげかもしれない。◇小池百合子の厚顔無恥っぷりに反吐が出る。記者会見の場で「民族差別とかそういうのではなくて」とサラリと交わした。食い下がらない記者にもイラついた。政府や司法がネトウヨたちに差別をしてもいいというお墨付きを与えている気がする◇東北には一度も行ったことがない。あの日、4階建てのセンターがユラユラと揺れたことを今でも思いだす。6年半が経ち、震災関連のニュースはあまり聞かれなくなった。原発事故はまだ収束していない。避難者の人数に計上されなくなった「自主避難者」。弱者を切り捨てる国の在り方やそれを支持する世論の多さに気持ちが萎える。娘たちが大きくなる頃はどんな時代になっているのだろうか。生きやすい土台を今、作ってあげなければと痛感する。機関誌のご意見ご感想、激励お待ちしております（森）

# INFORMATION

人権文化のまちづくり講座

## ヘイトスピーチってなに？

～ヘイトスピーチ解消法から多様な人との共生を考える～

とき：11月24日（金）14時～15時30分

お話：朴洋幸さん（NPO 法人多民族共生人権教育センター理事長）

詳細は同封の別紙チラシをご覧ください

全て  
入場無料で  
す！

現代的課題講演会

### ①出会いは世界を広げていく

～トランスジェンダー生徒交流会からの発信～

11月22日（水）19時～21時

お話：土肥いつきさん

（トランスジェンダー生徒交流会世話人）

会場：蛸池人権まちづくりセンター

申込み：当日会場

一時保育：11月12日まで申込（ひとり200円）

講座についての問合せは豊中市役所生涯学習課 電話 06-6858-2582

### ②私たちがともに生きるために

～『ちがい』と『まちがい』の境界線～

11月28日（火）19時～21時

お話：三木幸美さん

（とよなか国際交流協会職員）

会場：蛸池人権まちづくりセンター

申込み：当日会場

一時保育：11月18日まで申込（ひとり200円）

一時保育の申込は蛸池人権まちづくりセンター 電話 06-6841-5326

## 世界人権宣言 69周年記念豊中集会

### ①映画「ウリハッキョ」

11月16日（木）18:30～20:40

会場：豊中人権まちづくりセンター

申込み：当日会場（事前申込も可）

問合せ：とよなか人権文化まちづくり協会

### ②講演「朝鮮学校高校無償化裁判を考える」

11月30日（木）18:30～20:30

お話：中村一成さん（フリージャーナリスト）

リスト

会場：豊中人権まちづくりセンター

## 評議員のページ

## 施設コンフリクトに どう向き合うか？

宮前 千雅子【評議員】

今から3年前、近所に児童養護施設が開設した。児童養護施設とは、家庭の事情などさまざまな理由で家族による養育が困難な子どもたちが生活する場所である。言わば、家族に替わって社会が子どもたちを育てる場なのである。かつての大人数の子どもたちが大きな施設で合宿生活を営むような形式（大舎制）から、最近では施設の小規模化が図られるようになってきている。すでに阪神地域で長い歴史をもつ児童養護施設が建物を改築するにあたって、わたしたちが暮らす町に小規模の分園を作ったのだ。

事前にその話を知ったとき、「ラッキー！」と思った。なぜなら、もし、夫やわたしに万が一のことがあった場合、3人の子どもたちは地域内の施設にお世話になることができる。ということは転校などのリスクを抱えることなく同じ学校に通い続けられるし、同じ地域で生活することができるのではないか。そんな風に期待に胸を膨らませていたわたしの耳に、信じられないような声が周囲のおとなから聞こえてきた。「ややこしい子が増えて学校が荒れる」「うちの子が（施設から登校する子に）イジメられるかも知れない」。やがてその声は、PTAの会合などでも

表明されていくようになる。

この事態、いわゆる施設コンフリクトである。社会福祉施設や環境関連施設などの公共施設が新設するにあたり、地域社会の反対運動に遭遇して頓挫するなど施設と地域との間に起る紛争状態のことをいう。これまで起きた施設コンフリクトは、どうやって解決されてきたのか？いろいろ調べてみたところ、ある論文には住民よりも施設が「先住」していることが施設コンフリクトを防ぐ条件だとされていた。施設が「先住」って、そんなん、無理やん！その論文を読んだときの率直なわたしの感想である。確かに意味のない研究など無いのだろうが、いったい何のためにたくさんのデータや資料を集めて論文を書いたのか、その論文の著者に文句を言いたい気分になった。



※本文と関係ありません

とにかく、頑張るしかない。すぐにわたしはPTAの役員に立候補し、学習会の開催などさまざまな機会を通して、施設の開設に反対する人も含めてたくさんの人と議論を重ねていった。それらの経験から実感したことがふたつある。ひとつは、子どもはおとなを写す鏡だということだ。反対運動をしていた保護者は、自分の子どもが児童養護施設の子どものを侮蔑するような言葉を発することに驚いたという。それをきっかけにして、自分たちの行動が正しいことなのか振り返るようになったと話してくれた。また筆者とともに施設への偏見をなくそうと活動していた保護者は、施設開設後に開催した児童養護施設の見学会について自分の子どもと話していたときに彼が言った言葉にはっとしたと語った。

その子は「僕の住んでいる家を誰かに見学されるなんて嫌や。そやのになんで施設の子たちは自分の住んでいる



2009.11.29 人権文化のまちづくり講座  
「部落問題のいま」

所を公開せなあかんのか。そんなん不平等や」と言ったのだった。確かにわたしは、地域の理解を乞うために我が家の見学会など開く必要はない。ましてやこの地域に引っ越してくる前に、説明会など開くこともなかった。しかし児童養護施設の子どもたちはそうではない。彼の鋭い感覚に、周囲のおとなは脱帽だったようだ。子どもたちはおとなの行動をよく観察し、それを身に着け、さらには成長していくのである。

もうひとつは、人権を核にした活動は地域を豊かにすることである。学習会を重ねるうちに、それまで沈滞気味だったPTA活動に対して、なんと役員などに立候補する人が増えて活動が活発化してきたのである。また保護者と教職員との距離も自然と近くなった。施設の子どもを含めた子どもたちを真ん中に据えて、学校と地域のつながりが強くそして豊かになった気がしている。人権についての活動を活発化させることは地域を豊かにしていくのだと実感し、また解放子ども会を核にした地域や保護者、教職員の関係性に似ている気がして嬉しくなった。

かといって、すべてのおとなが児童養護施設を歓迎している訳ではない。これからも学習する機会を継続的に持ち続けることが大切だと思っている。余談ながら、わたしは校区に被差別部落を含まない地域で、部落出身を名乗って生活している。反対運動をしている保護者から発せられる「うちの子は、施設の子とは絶対遊ばせない」

る。この学習会に行ってこいと指令が下ったのも、米騒動についての話を聞くためだった。(事務局長は東北旅)

金澤さんは米騒動のドキュメンタリー番組を制作するにあたって、6000もの新聞記事を集めたという。当日資料にも1878年5月17日付けの『石川新聞』をはじめ、相当貴重な米騒動についての新聞コピーが配布された。

1918年に富山で起きた米騒動は、全国的に波及し、青森、秋田、沖縄を除くすべての都道府県で米騒動は起きた。さらに韓国をはじめ、アジア諸国でも米騒動は起きた。

その年は高校野球も中止になったそう。全国では激しい暴動が起きた米騒動だったが、富山では母親たちがお米屋さんに行って、ひたすら「お米をよそに売らんといてください」とお願いし、暴力的な行動は一切行われなかった。米騒動が時の政府を倒すほどの運動へと変わって行ったが、民衆とともにあったジャーナリズムが権力に巻かれ、権力側へと論調も変化していった。民主主義や自由の広がりを求めた大正デモクラシーと呼ばれたこの時代に起きた米騒動は、市民運動の原点ともいわれている。

## 細川嘉六と泊・横浜事件

米騒動とともにお話されたのが「泊・横浜事件」についてだった。日本で初めて米騒動について調査・研究したのは富山県朝日町出身の国際政治学者でジャーナリストだった細川嘉六だと



毎日新聞（富山版）2017.5.2

いう。

恥ずかしながら横浜事件も細川嘉六も知らなかった。1942年7月、細川が出版編集者や研究者ら7人とともに旅館で開いた慰労会で撮影された記念写真。特高警察はこれを「共産党再建準備会」の会合の証拠として検挙された。さらには芋づる式に研究者ら60人余りが逮捕され、凄まじい拷問によって4人が獄死した冤罪事件だ。

敗戦後に治安維持法は廃止され、横浜事件は「免訴」となった。平成の治安維持法ともいわれる共謀罪についても触れてもらう予定が時間が足りずに終わってしまった。

2018年は米騒動から100年。米騒動が部落の人々にも非常に大きな影響を与えたはずだ。来年はそんな視点から部落問題についてを考えてみたい。

**■被災地巡り 現状垣間見る**

佐佐木寛治 66歳  
(大阪府豊中市・団体職員)

8月下旬、5年ぶりに石巻市を訪ねた。東日本大震災の津波で被災した市立病院が、JR石巻駅前に移転新築されていた。街は人通りが多く、見違えるようだった。

役目を終えた仮設商店街は閉じられ、旧北上川沿いに「いのまき元気いちば」ができていた。その中のフードコートで、海鮮丼など石巻の旬を味わった。

日和山公園に向かう道路も整備されていたが、両側には津波によって破壊された建物の跡が、空き地となつて広がっていた。

川沿いにあった家々は姿を消したままで、かつての風景は戻らないのだと改めて感じた。

南三陸町にも足を延ばし、ホテルの語り部バスに乗り、町内を巡った。志津川湾から川をさかのぼった津波は、奥にある集落にも襲い掛かり、甚大な被害を出した。結婚式場「高野会館」にいた人たちは、職員の手伝いで助かった。だが、防災対策庁舎では、屋上に避難しても43人が犠牲になった。

そんな生々しい惨状を聞いた。語り部の方は「津波を想定した避難訓練はしていたのだが、想定の数値を思い知らされたと言っていました。今回の訪問で、震災から6年半となる被災地の現状を垣間見た。

河北新報 (9月7日)

# 報告④

## 2018年は米騒動から100年

森山 輝子【事務局】

### 富山の米騒動

8月26日、9条連近畿（憲法9条一世界へ未来へ 近畿地方連絡会）主催の学習会「泊・横浜事件と『共謀罪』法について」に参加した。

会場のPLP会館がどこなのかさっぱりわからず、自転車に乗ったおっちゃんにどこにあるのかを尋ねた。どうやら通り過ぎてしまっていたみたいなので来た道を戻り、交差点を曲がると「そっちちゃうかったわ。こっちはわ、ここ」とさらに一本手前の道路まで丁寧に自転車で誘導してくれた。ありがたい限りだった。会場に着くと、席は

ほとんど埋め尽くされていた。なんとか一番前の席に座ることができた。お話をしてくださったのは、元北日本放送ディレクターの金澤敏子さん。横浜事件の中心人物、細川嘉六研究会の代表も務めている。金澤さんはアナウンサーとして入社するも、ニュースを読むだけの仕事に物足りなさを感じ、ディレクターに転身したそうだ。元アナウンサーということもあり、とても聞き心地の良い声をされていた。定年までに約50本のドキュメンタリー番組を制作された。金澤さんは富山県出身で、米騒動の発端となった地でもあ

などの言葉を耳にすると、「施設の子」が「部落の子」に聞こえてしまうことが度々あり、地域でカミングアウトすることが少し怖くなったこともあった。

児童養護施設は無事に開設し、いまでも40人前後の子どもたちが生活している。わたしは、その子たちの応援団

でありたい、そう思って同じ地域で暮らしている。

こんな風に、目の前に何か問題があったなら、決して放置はできない性格のわたしです。評議員としてできることを頑張っていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

# 報告①

## 山口賢次さんと宇和島差別殺傷事件

溝口 正美

### はじめに

1967年の豊中支部再建大会で書記長に選任されて困ったことのひとつに、豊中水平社以来の運動の経過や部落の歴史などの資料が、まったくなかったことである。以来、日々の運動の中で資料の収集に努めてきた。豊中水平社創立60周年・豊中同和事業促進協議会創立30周年記念誌「人間の血は涸れず」として、部落の歴史や解放運動を何とか纏められたのは1984年のことであった。しかし、不十分さがあり、すぐにでも改訂版を出したいと「あとがき」で述べている。欠落しているひとつが山口賢次さん（資料1）の宇和島差別殺傷事件（資料2）への関わりであった。

山口賢次さんが全国オルグとして宇和島に入ったことは、寺本知さんから聞いていたが、その内容が不明で「血

は涸れず」には記述することができなかった。後日、弁護士の和島岩吉先生（資料3）がこの裁判の弁護人であったことを知ったとき、先生はすでに逝去されていてお話を聞くことが叶わなかった。

### フィールドワーク

協会から四国部落史研究協議会夏期合宿への参加のお誘いがあり、案内文にフィールドワーク「宇和島市内の部落・八幡神社秋祭り差別殺傷事件」の研修とあったので、参加することを決めた。8月11日、協会事務局の重本洋輔さんとフィールドワークに向かった。

始めに訪れたK地区は、三方を山に囲まれた谷地で、人間が住むにはあま



り良い環境とはいえない立地であった。T寺に案内されたときにあまりの立派さに驚いたが、宇和島の部落は小さな集落なので宇和島城を中心に南北に分けて、城の南側の部落はT寺の檀家になり北側の部落はS寺の檀家になっているとのことであった。

次に納骨堂に案内されたが、そこには数人の人が清掃に励んでおられて、その人たちからお話を伺うことが出来たのは幸甚であった。かつての処刑場跡地に同和対策事業で建てられたそうで、罪人であった人、無縁の人をも受入れて盆の前には清掃に汗を流すK地区の人たちの懐の深さに感動をおぼえた。

次いで案内された城の北側に位置するI地区は、山の斜面にあってS寺は斜面に張り付くようにして建っていた。今から400年以上前の慶長20年(1615年)ごろに仙台の穢多の人たちが、伊達秀宗(政宗の長男)が宇和島藩主になった時に移住させられ建立したのがS寺で、宇和島の穢多頭曾根太郎左右衛門の墓が寺の裏にあった。

## 宇和島差別殺傷事件

八幡神社、事件の発端となった休憩所、そして殺傷事件の現場となった御旅所の弁天神社などを回り、説明を受けることができた。フィールドワークの案内役でもあるFさんは事件当時、小学3年生で、ヨイサと呼ばれる太鼓台の叩き手として参加していて、弟のように可愛がってくれていた従兄が不条理にも命を落としたことなどの説明を受けた。事件を目撃されていた生き証人からのお話に胸が痛んだ。また、FさんはS寺の生まれで、成人してからは教師をされていたとのことである。

部落問題・人権事典には「女の子を乗せ」とあったが、その時代に女の子が太鼓台に乗ることに疑問があったのでお聞きすると、「男の子だけ」との回答があった。事典の訂正を求めなければと思った。

事件後、直ちに山口賢次さんが全国オルグとして宇和島に入ったが、Fさんからは山口さんの名前を聞くことはなかった。部落民大会を開き、市役所前で真相報告講演会を開いて市民に訴え、各市民団体などにも訴えるなどの動き、部落解放同盟愛媛県連合会八幡事件闘争本部を設置し、全国に支援を訴えるなど、大衆闘争の体制を整えたのは、山口さん以外には考えられないと感じた。

裁判の決着がつくと、「潮が引くように全国からの支援がなくなった」との説明で、せっかく盛り上がった運動

げされた台地がとてつもなく高くなっていたことにも驚いた。しかし、新しい街はまだその姿を見せてはいなかった。雨の中、BRTバスで宿のある大船渡へ。

## 「田老篇」

三日目(8/25)は、BRTバスで大船渡から盛、三陸鉄道南リアス線で釜石へ。岩手県バスに乗り換えて「道の駅山田」から、さらにバスを乗り換えて宮古、北リアス線で田老まで、4時間40分乗り詰めだった。

駅を降りて北の方に10分ほど歩くと、真新しい野球場と“万里の長城”と言われた10メートルの防潮堤が見えてくる。見上げるほど高くて頑丈だ。⑪階段を昇って上に立つ。海沿いにカーブを描いている。⑫津波はこれを超え、内も外も飲み込んだのか！一部壊れた剥き出しのコンクリートが生々しさを伝えている。



そして、向かったのは田老観光ホテル(6階建て)。変わり果ててなお立っている姿は痛々しい限りだ。17メートルを超える津波が4階まで達し、1・2階は鉄骨だけに、3階は壁だけになっている。⑬

遺構として保存されていることに感謝。敷地内には移動したことを示す標識もあり、地殻変動の大きさを物語っていた。ここでもあちこちで工事が行われており、町の復興はこれからだと痛感した。

時間とともに景色は変わり、記憶も風化していくことは避けられない。しかし、今ならまだ記憶に刻むことはできる。そう、まだ。直接出向いて目の当たりにすることが一番だが、そうもいかない。拙いレポートがその一助になれば幸いだ。



当時、屋上に避難していたのは54人。想定されていた高さ6.5mの津波にも耐えられる設計だったが、襲った津波は2倍以上の15.5mだった。庁舎は屋上のアンテナ部分以外を残して水面下に埋まり、43人が命を落とした。⑨遺族や関係者それぞれに様々な想いがあり、これを壊すのか、残すのかについても賛否両論あり、紆余曲折があったという。それらをふまえて、宮城県が2031年まで管理（保存）することになったそうだ。



⑨

### 「奇跡の一本松篇」



⑩

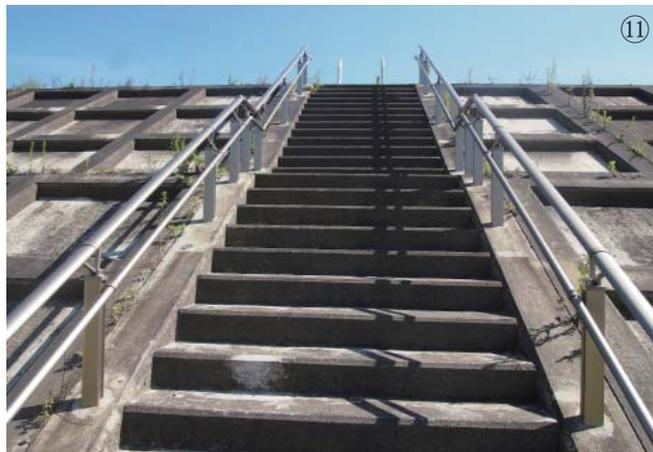
ホテルから志津川を経てBRTバスで気仙沼から「奇跡の一本松」へ。一本松茶屋で「岩頑楼ラーメン」をいただいていると、あやしい空模様が気になっていたが、やはり降ってきた。やむなく雨の中を「一本松」をめざして歩く。すぐそこに見えるのだが、グルグルと遠回りをさせられる。

⑩

天気がよければじっくり見るところだが、気持ちが急ぎ、写真を撮ってそそくさと引き返す。

⑪

ここが一番の変化は、2年前には山から土砂を運ぶ巨大なベルトコンベアーが何本も空中を行き交い、宇宙都市にきたような印象を受けたが、それらはきれいになくなっていったことだ。そして、かさ上



の機運がしばみ、以後愛媛県の解放運動は冬の時代を迎えたことを知った。

### おわりに

宇和島に灯った解放の火が消えたのは、当時の解放運動の力量の反映で、全国オルグとして宇和島に何ヶ月も入った山口さんは働く事が出来ず無収入で、豊中の家族は生活に困窮するという状況であった。事件から2年後に全国書記長になったが、生活保障も無い中での運動で、翌年には生活苦から自らの命を絶たなければならなかつ

た。全国書記長の生活保障すら出来ない運動状況であったから、愛媛、宇和島に運動の旗を掲げても、支援することが出来なかったのではないだろうか。

今回のフィールドワークで、山口さんの名前を聞くことはできなかったのは残念であった。山口さんと宇和島の関わりの解明は未だ道半ばであり、今後も機会を見つけて調査を進めなければならぬとの思いを強くした。

文中の固有名詞を伏せ字にしたのは、地元の強い要望に沿ったものである。

#### 【資料1】山口賢次（やまぐちけんじ）

1908.1.28 ~ 1951.7.6 大正・昭和期の部落解放運動家。大阪府豊能郡豊中村（現豊中市）に生まれる。豊中水平社の創立後、水平運動に参加し、1925年には全国水平社無産者同盟豊中居住班長、のち同大阪支部執行委員となり、3.15事件で検束。31年以降は、今西弥之助亡きあとの豊中水平社を指導し、34年以降は全水常任中央委員、38年の第15回全水大会で中央委員として活躍。戦後は部落解放大阪青年同盟を舞台に活動。48年の部落解放全国委員会第3回大会で常任中央委員となり（～第6回大会）、同年愛媛県宇和島差別殺傷事件のオルグに入る。49年以降、松本治一郎公職追放反対闘争の中心となり、50年は請願隊長を務めた。同年4月の第5回大会で書記長となり、自らハンガーストライキに参加。生活苦などから翌51年7月に東京で服毒自殺。

#### 【資料2】宇和島差別殺傷事件

愛媛県宇和島市での差別事件に端を発した抗争事件。1948年10月16日宇和島市八幡神社の祭礼の際、〈ヨイサ〉を曳いて休憩するA町の人たに、街の青年Bが酒気をおびてケンカをふっかけてきた。Bはさらに部落青年Cに差別言辞を弄し、暴行しよとしたことから組み打ちとなる。この騒ぎを知ったBの仲間が多数、〈ヨイサ組〉を襲い、暴行に及んだ。宇和島署長らが駆けつけ、鎮圧し一時収まったが、再度20数人の暴力団が日本刀・拳銃など凶器を振りかざして襲撃、A町側青年との間で乱闘となり、双方多数の死傷者が出る大惨事となった。A町側の正当防衛であったが、殺人・同未遂事件として双方10人が起訴され、裁判の結果、一部を除いて有罪となった。



### 【資料3】和島岩吉（わじまいわきち）

1905.8.5～1990.5.13 弁護士。大阪府に生まれる。高等小学校しか行けなかったが、19歳のとき独学で京都・東山中学4年に編入を認められ、翌年旧制松江高校に合格。1930年京都低大法学部在学中に高等文官試験合格、卒業と同時に弁護士になる。67年大阪弁護士会会長、71年日本弁護士連合会人権擁護委員会委員長、73年同連合会会長。在野法曹として人権擁護の先頭に立ち、山口の加藤老事件、徳島のラジオ商殺し事件、狭山事件など数多くの冤罪事件を闘った。部落解放運動の分野では46年部落解放大阪青年同盟の創立に参加し初代委員長を務める。その後も大阪府同和事業促進協議会の初代会長、大阪人権歴史資料館（現大阪人権博物館）の初代理事長などを歴任。82年に松本治一郎賞を受賞した。著書に『三つの無罪』（1960）、『完全なる冤罪』（1981）、『人間に光を』（1989）、『和島岩吉』（1985）など。（出典『部落問題・人権辞典』）

## 報告②

## 宇和島フィールドワークに参加して

重本 洋輔【事務局】

### はじめに

8月11日、四国部落史研究協議会の主催でおこなわれた愛媛県宇和島地区内のフィールドワークに溝口正美さんとともに参加してきたので、この場を借りて報告したい。



今回、我々の目的は、宇和島の部落の歴史や現状について学ぶとともに、1948年に起こった八幡神社秋祭り差別殺傷事件の詳細について知ることである。参加者は部落史について研究されている年配の方や教職員の方、子どもを含めた家族全員で参加している方など全員で28名、地元の方が「宇和島では珍しい」というほど蒸し暑い中、フィールドワークがスタートした。

### K地区とI地区

Fさんという地元の方の案内で、まず徒歩にて宇和島の被差別部落の一つ



⑥ さの判断が生死を分けたと言う。⑥

次に向かったのは「高野会館」。地震発生時、3階では老人クラブによる「高齢者芸能発表会」の閉会式のさなかで、強烈な横揺れに客はパニック状態になった。会館を出ようと、ロビーに殺到した人の前で、従業員が仁王立ちになり、「生きたかったら、ここに残れ！」と行く手を遮った。結果、330人の命が救われた。この建物のオーナーは「千年に一度の災害は、千年に一度の学びの場。生き残った者として震災を風化させたら亡くなった人に申し訳ない」として震災遺構として残しているそうだが、その志に敬意と感謝を呈したい。



⑦

次いで、ダンプカーがひっきりなしに行き交い、かさ上げ工事が行われている中を通り抜け、「防災庁舎」へ。建物の近くも工事中で100メートルほど離れた献花台から眺める。



⑧

青空を背景に剥き出しの赤い鉄骨だけがその場にあって異彩を放っている。その姿は何とも無残としか言いようがないが、見る者を撃たずにはおかない力を持っていることも事実だ。⑧

には以前の写真パネルが置いてあり、目の前にする風景との違いがわかった。川の両サイドや中洲からはかつて密集していた家々は消えていた。一見すれば問題はないように見えるが、こうして見比べればその違いははっきりわかる。あちこちで重機が忙しく動いていて、街全体の復興はこれからだと感じた。

③④



## 「南三陸町篇」

二日目（8/24）は、ホテル企画の「語り部バス」で南三陸町内を回った。快晴の志津川湾は穏やかだったが、あの時、海は牙を剥き、津波は高台の戸倉中学校まで達し、川を遡って奥の集落をも呑み込み、多大な犠牲者を出した。中学校の時計はあの日の時刻のままにあった。⑤



ガイドさんによると、戸倉小では、3分で津波が到達すると宮城県沖地震を想定し、校舎屋上への避難を検討していたが、教職員のとっさの判断で高台への避難を選択し、難を逃れた。隣接の戸倉保育所も戸倉小屋上への避難をマニュアル化していたが、高台に避難し救われた。津波は高台までも迫り、さらに高い神社へと移動した。もし、普段通りにしていたら…。とっ



K地区内を見学。ここは山に面した場所にあり、豊中や蛭池とは違う雰囲気、個人的には母の故郷である茨木市内のS地区と似ているように感じた。

ここでは地区内にあるT寺やS神社、処刑場跡に建てられた納骨堂などを順番に回っていき、T寺が500年以上の歴史を持つお寺であること、S神社には疱瘡（皮膚病）の神様が祀られており、かつてハンセン病患者がよくお参りにきていたこと、納骨堂の周りにはある墓標は、過去に処刑された罪人など、無縁仏を供養するために建てられているといった話を聞くことができた。

続いてバスで少し離れたI地区まで移動し、地区内にあるS寺を見学。この本堂は戦時中に空襲で一度焼かれてしまったが、住民や檀家さんの協力によって戦後すぐに建て直されたそうだ。寺のそばにある墓地には宇和島藩の穢多頭だった曾根太郎左衛門の墓があった。また、伊達政宗の長男である秀宗が宇和島藩の藩主となった慶長20年（1615年）頃に、仙台から穢多

身分の人達が連れて来られたといった説明があった。なぜ、連れて来られたのかは定かではないが、「わざわざ連れて来たということは当時の穢多身分の人達が何か特別な技術（鎧兜の製造など）を持っていたからではないか？」というのが溝口さんの推測である。

## 八幡神社秋祭り差別殺傷事件について

その後、八幡神社秋祭り差別殺傷事件の現場に訪れた。この事件は八幡神社の秋祭りに参加していた部落の青年に対する地元愚連隊からの差別発言・暴力行為をきっかけに起こった乱闘事件である。最初の小競り合いは警察が介入したことでおさまったものの、祭りの途中、日本刀や七首、ピストルなどで武装した愚連隊と暴力団約30名が部落の青年たちを襲撃、双方から多数の負傷者と5名の死者を出す大惨事となった。事件の現場となったのは弁天神社という非常に小さな神社（御旅所）であった。この神社は児童公園に隣接する形で現在も残されているが、かつての惨劇を伝えるものや連想させるものは何もない。何も知らない人にとっては、ただの小さな神社と公園である。

ここで我々は、案内人のFさんが惨劇の一部始終を直接目撃した言わば生き証人であることを知る。当時Fさんは小学三年



生で、襲撃があったのは皆で昼食をとっていた時だった。近隣で警備にあっていた警察官は暴力団らの猛威に恐れをなして、ただただ傍観するだけであったが、部落の青年たちは女性や子どもを守るため、武装した連中を相手に、ある人は素手で、ある人は近くの畑から杭を引っこ抜いて立ち向かった。Fさんは「あちらでもこちらでもチャンチャンバラバラが…」などと少し砕けた表現で当時を振り返っていたが、このとき、自分を弟のように可愛がってくれていた従兄を目の前で殺されたようだ。

悲劇はこれで終わりではない。この事件、部落の青年からすれば、相手の襲撃から自分たちの身を守るために応戦せざるを得なかったわけだが、世間の差別意識や誤った新聞報道によって、「武装した部落の連中が秋祭りで乱闘事件を起こした」など、まるで彼らが加害者であるかのような認識が広まる事態となった。そればかりか、検察も裁判所も「正当防衛」を認めようとせず、殺人・同未遂事件として彼らに有罪判決を下したのだ。その結果、宇和島では裁判闘争と行政闘争が起こり、部落解放全国委員会を中心に全国から多くの仲間が応援に駆け付けることになった。豊中で水平社運動に尽力された山口賢治さんもその一人であり、このとき山口賢次さんは宇和島から何か月も戻ってこなかったといったエピソードがある。

Fさんは、「差別から逃げずに闘い抜く」「闘争の武器は暴力ではなく正

しい知識と情熱だ」を合言葉とした当時の裁判闘争や行政闘争について、これらの闘争がきっかけとなり、宇和島での同和行政がスタートしたことについても話してくれた。差別意識によって罪のない部落の人が犠牲になったり、悪者にされるといったとても悲しい事件であるが、本や資料で読むのと、事件の現場に実際に立って当事者から話を聴くのとでは、同じ事件でも印象が全然違う。僕自身、かつて1877年に豊中で起こった千里川の水あらしのことや狭山事件の石川一雄さんのことと重ね合わせながら話を聞くことができた。

### 最後に

今回のフィールドワークへの参加は、「宇和島での山口賢次さんの動向について詳しく知りたい」といった溝口さんの強い希望によって実現したものである。残念ながら今回のフィールドワークでは、溝口さんが最も知りたかった山口賢次さんについて知ることはできなかったが、僕自身は、宇和島の郷土料理を味わうとともに、実際に見て歩くことで、その土地の歴史や現状について学ぶといったとフィールドワークの醍醐味を存分に味わうことができた。おそらく自分一人では実現しなかつたろう。また、この旅を通じて、溝口さんから昔の豊中の様子から山口賢次さんや寺本知さんのエピソードなど、貴重な話を聞くこともできた。

溝口さんは、今回のフィールドワー

## 東北レポート

# 2017 東北夏旅 「あれから6年半、 被災地を歩く」

佐佐木 寛治【事務局長】

「現場を踏む」ことを大事にとの思いから、「3.11」後、年に一度は被災地を訪れてきたが、去年は実現できなかった。今年はどうしてもとプランを練り、石巻から南三陸、陸前高田、田老というルートを組みだ。①



### 「石巻篇」

初日(8/23)は、伊丹空港から仙台空港へ。JR仙台駅から仙石線で石巻へ。最初に訪れたのは2011年8月で、冷たい雨の中を2時間半近く歩いた。津波に襲われた街は、人気がなく、全半壊した建物群がその時のままに傷跡を晒し、息をのむような風景が今も焼き付いている。それと

比べると、駅前には全壊した市民病院が新築移転していて、人も行き交い、大きな変化を見せていた。

町中にあった仮設商店街も役目を終えて閉じられ、旧北上川沿いには「げんき市場」がオープンし、地元の海産物が並び、フードコーナーでは海鮮丼などをいただくことができた。あの時は食べる場所は皆無だったことを思えば雲泥の差だ。②



川沿いの道路は新しくなり、建物はきれいに解体・撤去され、家はポツポツあるだけで、ほとんどは更地のままで、駅前とは様相が違っていた。日和山公園の街を見下ろせるスポット



ました。それが当たり前でした。豊中は、人権豊かなまちにしようと取り組んでいます。特に部落問題は、しっかりと向き合って自分のものにしなければならぬと思います。」

これは、今年6月7日に開かれた校区「人権協」地区代表委員会と地区委員会各々で語られた話である。どこでも、DVD「光射す空へ」鑑賞（「若年認知症」「LGBT」「同和問題」が提起されたもので、5月の「人権協総会」で上映）のあとに、意見交流を行う。最初は、「認知症」や「LGBT」の感想からスタートする。身近に感じる課題だからだろう。が、一回りする頃になってから、言わなきゃダメ、語らなきゃ自分ではない、というふうな感じで感情が込み上げるのを必死で堪えながら手を挙げて語られた内容だった。過去の体験を重たい気持ちで引きずりながらも、課題にしっかりと向かっていこうとする気持ちが伝わってきたし、学んできたことの大事さを、やっぱり言い続けていかなければならないのだとの意思をひしひしと感じた場であった。自分ごととして語られる、噛み締めた言葉とその雰囲気は、集まったみなんちの気持ちを引き締めた。

## 紡ぎ合う営み

私は、退職後、「豊中市人権教育推進委員協議会」（人権協）に関わるようになった。そして今年で3年目を迎える。現場にいるときも人権協に関



人権協総会 (2017.5.12)

わっていたが、会合の場所提供としての学校関与といった情けないお付き合い程度のものであって、人権協発足の意味合い等については興味関心の全くの対象外であった。

「豊中市人権教育推進委員協議会（人権協）は、その発足が豊中市民による「身元調査」が契機になったこと、そのためには市民こそ人権教育を大事にすすめていかなければならないことが問われたこと、それも個人参加による市民組織であること、「身元調査お断り運動」が大阪全体で提起されたときには「身元調査をしない」運動として市民主体の運動を展開したこと、そのような豊中に学んで市民組織を作ろうとした他自治体があったものの長続きしなかったこと、その意味からも全国でもまれな自主的な市民組織だということ、1984年に「豊中市人権擁護都市宣言」が宣言されたが、それは推進委員が街頭に出て汗まみれになって獲得した8万人を超える署名活動の結果、議会で採択された宣言であること、いわば、自分ごととして人権尊重

## 麒麟の子

鳥居歌集

鳥居

上げ船で日本に戻るも食うや食わずの日々。東京・山谷で廃品回収をしていた名も知らぬ朝鮮人のおじいさんから

拾い集めたかるたで文字を教わる。学ぶ喜びを初めて知ったという。高野さんのことを知ったのは15年以上前だが、久しぶりに顔を拝見して思い出したのがこの一冊だった。

両親の離婚、母親の自殺、施設での虐待、小学校中退、ホームレス生活。拾った新聞で字を覚え、短歌に出会った。この数行を読んだだけでも凄まじい人生だというのがわかる。本書が短歌ではなく、エッセイだったら、壮絶すぎて読み進めることが難しかったかもしれない。短歌に出会い、言葉を獲得した彼女は、これまでの人生を短歌にして表現するようになった。そして、義務教育を受けられないまま大人になった人たちがいることを表現するためにセーラー服を着ている。高野さん77歳。鳥居さんは年齢は非公表だが20代との情報がネット上に掲載されていた。（あくまでネットなのでデマかもしれないが）

二人の年齢は離れているけれど、この国の根本は何も変わっていないのかと虚しさを覚える。

短歌には彼女が生きてきた人生がな

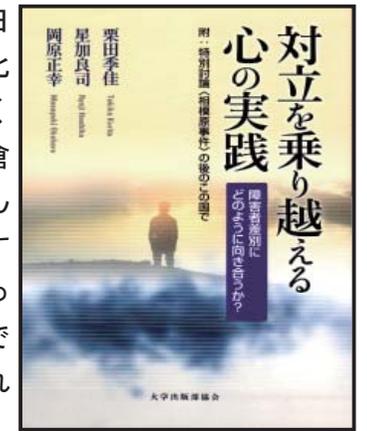
まなましく歌われているが、優しく美しい短歌もある。生きることの意味を問われている気がした。

## 「対立を乗り越える心の実践 障害者差別にどのように向き合うか？」

栗田季佳・星加良司・岡原正幸 大学出版部協会

9月21日の人権文化のまちづくり講座に倉本智明さんをお招きするにあたって、読んでおかなければと思い、ページをめくった。本書は市民シンポジウム「対立を乗り越える心の実践」を基に刊行されたブックレットの4冊目である。第5章では特別討論として相模原事件について触れている。

78ページの読みやすいブックレットだが、第1章の「見えない偏見」（栗田季佳）の章に気づかされるのがたくさんあった。「障害について正確な知識や理解を学ぶよりも、自分という生き物がどういう心の特徴を持っているのかとか、自分がどう振る舞うか。そして個人と個人の具体的な関わりの問題として、差別や偏見に向き合うこ



玄関展示では、平和や非核・反戦についてのパネル展示や絵本の紹介とともに、来館された方や子どもたちには「平和ってどんなこと？」について、たくさんのコメントをいただきました。

その他「人権講演会」(8/5)では、大阪府立柴島高校の指導教諭をされています、副島勇夫さんに「互いの違いを認め、受け止める集団作り」をテーマにお話をいただきました。

「すいとんづくり」は毎週木曜日に実施している、高齢者事業の「ミニデイサービス」の中で、みんなで「すいとん」を作って、子どもたちと一緒にいただき、「平和の折り鶴」では、パ



ネル展に合わせて、こどもから高齢者まで、センターを利用する方に声をかけながら、折り鶴を折っていただきました。

この「平和と人権月間」に合わせて、とよなか人権文化まちづくり協会としても、蛍池人権まちづくりセンターで「平和映画会」を実施しました。

上映内容は「ボクとガク あの夏のものがたり」の上映で、今回は、子どもも観れる内容にし、センター活動に参加している子どもたちや、校区外からも親子で参加されたり、留守家庭の取組みをされている団体さんも子どもたちと参加していただきました。

## 書評

### 「麒麟の子」ほか1冊

森山 輝子 (事務局)

#### 「麒麟の子 鳥居歌集」

著者：鳥居 角川出版

9月15日、リバティおおさか裁判に参加した。裁判後の報告集会で高野

雅夫さんがお話されていた。高野さんをご存じだろうか？旧満州（現中国東部）で生まれ、戦災孤児となった。敗戦と同時に母親とともに逃げたが、途中ではぐれてしまった。その後、引き

の意識を高める市民運動があつてこそつくられたものであること、そして今、「人権文化のまちづくりをすすめる！人権意識をより高める！人権尊重の輪を広げる！」の3つを基本に活動をすすめていること、そして最も大事にしようとしていることは、学んで大事だなと思ったことを「自分だけのものにせず、周囲の人、一人ひとりに伝えていこうとしていること。それが「人権協」だということ。

退職後に人権協に関わって、先人の「差別」に真正面から向き合い、そして「差別解消」に向けた「輪の拡大」を図る運動の展開を知って、面食らう自分であった。そして、冒頭のような市民委員の語りがある。活動をとおして、丁寧にそれぞれの思いを出し合い、紡ぎ合う営みが生まれ、大きな力となっていく。自分自身がいい加減に受けとめていた「人権協」だったが、具体にかかわることによって、本当に身近な方々から真剣に生きていくことの大事さを学ばされたような気がした。

#### 校長の想い

7月の終わりに校内研修に呼ばれた。DVD「光射す空へ」を上映後、15分程度簡単に話をしてほしいということだった。当日、研修後に目を通してほしいと思って、「人権協はこうして生まれた」、「豊中市人権擁護都市宣言と私たちの人権」(2つとも「人権協

結成40周年記念誌」より)、「人権に関する年表(豊中を中心に)」(独自作成)、「なぜ今、同和問題なのか」(広報とよなか)2016年2月号)、「ある人権研修の感想へのメッセージ」(「解放」第1863号「ある人権研修でいただいた感想から」)の5つを準備した。前もって学校に印刷を依頼していたのだが、研修当日に受け取った資料の最終ページには、「部落差別の解消の推進に関する法律」が付け加えられていて、校長の職場に賭ける構えが伝わってきた。

研修は、全教職員が参加、本当に若い教員が圧倒的に多い。校長は、「この間、私たちの職場は、本気になって部落問題について研修を深めてこなかった。もしかしたら、初めてこのような人権課題に出会った教員もいるのかもしれない。だからこそ、今、私たちは、あらためて学習を深め、自分のものにしていかなければならない！」と研修冒頭に語る。鑑賞後には、学年ごと感想や意見の交流があつて、全体まとめの発表と研修はすすめられ、私の出番となった。

#### 若い教職員とのギャップ

話の切り出しは、この夏の「2017豊中市人権教育夏季研究会」の配布冊子の冒頭挨拶文の「まちづくり協会」からのメッセージを用意した。だがしかし、「インターネット上の身元調査」等の言葉に触れながら覗き見える教職員の表情は、全体的に無反応感が漂っ

ていた。

慌てて「身元調査って?」「部落地名総鑑って?」「同対審答申って?」って立て続けに聞かざるを得なかったのだが、残念ながら、若い年齢が占める教職員のほとんど(中堅といわれる年代も)が「知らない!」って手を挙げる。「同対審答申」は、かつての教員採用試験には必ず出題されたものだ。そのギャップ感に愕然としてしまう。「法切れ」の意味合いの恐ろしさを実感した。そのまま、続けてメッセージ「部落差別はお化けのようなもの」を読み上げていったのだが、空回りの感は拭えなかった。

これらの事務的な経緯や組織的な説明が、参加する人たちの気持ちを揺さぶるものではないことは重々予想してはいた。だから、校長からの「若い教員に!」という要請に応えるには、研修の締めくくりとして、身近な学校関係者の言葉や語りを伝えていくことが一番だろうと思っていた。

## 自分ごととして向き合う

そして紹介したのが冒頭の校区在住の方々のお名前だった。個別のお名前を挙げながら紹介したこともあって、多くの職員はその人のことを思い浮かべながら、少しはその思いを受け止めたのではないかと思った。同対審答申も部落地名総鑑のことも知らなかった、そんな多くの教職員だったが、「知ることの大事さ(LGBT、認知症、部落)」を学んだ研修会だったはずだし、身近

な親や地域の方々の中に、自分ごととして人権課題に向き合おうとするひとたちがおられるのだということを噛み締めていってほしいし、そしてやっぱり、この教職員のみなさんに期待していきたくてと思った7月末の研修会だった。

## 現地研修へのこだわり

9月に入って、隣の校区の地区委員現地研修に参加した。ここでも互いに「学ぶ、学び合う」ことを実感する場面があった。一つは現地説明者への質問責め(これはどこでもあるか)で、二つ目が「振り返り」だった。

それも楽しみにしていた研修後の昼食時にである。正直、「お昼やで…」と思ってしまったのだが、そんな雰囲気はない。それぞれが感じたこと、疑問を抱いたこと等、丁寧にしっかりと語り、聞き受け止める雰囲気があった。「ひとのこころ」に寄せる思いが、みなを惹きつけるのだろう。事務的な自分ごとではない語りは、虚ろなものとなり、ひとの心を揺さぶらない。現地研修をリードするリーダー委員の頑固なまでの振り返りに向けての拘りも驚きものだった。

人権協構成委員は4000名を超える大所帯だ。現在の委員出所のベースはPTAである。毎年のPTA役員から順次推進委員となる。自ら手を挙げて委員となった人たちは皆無だろう。「なりたくてなったわけではない」「役がついてまわってきて」、それが本音で

参加された方からは、

- ・実際に地域を歩き、お話を聞かなければわからないこと、見えてこないことがたくさんあると思う。知ることの大切さをあらためて感じた。
- ・昔の様子や歴史を教えてもらい、歩く事で、当時の人々のくらしを感じる事が出来ました。肌で感じる事のできる大切さを感じました。



・部落問題について自分のしっかりした考えを持っていられるようにしたいと思います。

・今後差別について考える時にイメージしやすくなったと思う。また自分自身が無意識に差別をしていないかと疑うことが大切だと感じた。

多くの方が「他の地域となんだ変わりが無い」と言われます。違いがあるから差別をしてもいいわけではないですが、何も無いのに差別される、差別があるおかしさ、いつまでもまちがったことが伝えられるおかしさ、根強く残る人の心の中の差別意識を少しでもこの地を知ってもらい、感じてもらい部落差別の解消に繋がればと毎回力が入ります。

## 蛭池地域から 「平和と人権月間」では…

福島 智子【事務局】

十八中学校校区では、8月を「平和と人権月間」として、様々な取り組みを行いました。

蛭池人権まちづくりセンターでは、「平和の手作りパネル展」「人権講演会」その他、高齢者と子どもの交流事業として「すいとんづくり」などの取り組みを行いました。

なかでも「平和の手作りパネル展」(8/1～8/31)では、日頃からセンター事業に活動・協力している高校生や

青年のみなさんの協力も得ながら作成し、玄関展示しました。



など、虐殺が事実であることは今さら言うまでもないはずである。昨今、ヘイトスピーチが横行するとともに、歴史を修正しようとしたり都合よく解釈しようとする流れがある中で、こうした動きや発言は、知事としてそうした流れに同調し、ヘイトを容認しているに等しい。

小池知事自身が元々右翼思想であるとか、ヘイト政治家であるなどと言わ

れていることは置いておくが、「歴史を忘れず過ちを繰り返さない」「ヘイトスピーチを許さない」といった姿勢を都民に示していくのが本来の知事の役目ではないだろうか。

また、我々も事実は事実としてきちんと認識し、正しく伝え続けていくとともに、不穏な動きや流れに惑わされない力をつけていかなければならない。

## 豊中地域から 「部落問題をきちんと知り、学ぶフィールドワークに取り組んで」

酒井 留美【事務局】

7月、とても暑い中、部落問題を学ぼうと大阪大学・関西大学の学生や、豊中市選挙管理委員会事務局と高齢施策課・高齢者支援課の職員、4組の方々がフィールドワークに来られました。豊中の部落の歴史を知っていただき、実際にその地を歩いて学ぶという研修です。

センター→轟木公園→と場跡地・畜魂碑→昔のメイン通り→青年集会所→轟温泉跡地→住宅1・2棟→住宅3・4棟→信行寺→同和指定を受けた所のところとそうでないところの境目（末広町）などを回ります。

みなさん暑い中、汗を流し真剣に話を聞いてくださいます。



ムラの方からは「わざわざ部落を教えなくてもいいんじゃないか」など批判の声も聞こえてきますが、今、インターネットなどで部落の地名などが簡単にわかるので、正しく知ってもらうことは大切だと思っています。

あろう。しかし、その彼らがつくるやりとりが上述のとおりである。教員経験者の自分にとっては、学校現場以上の真剣な空気を感じた。まさに「親に学べ!」、これが実感!

## この豊中でさえ

少し話はかわるのだが、同じ7月末の教職員互助組合「府民夏季セミナー」で、大阪国際大の谷口真由美さんは、次のようなことを語られたと新聞に載っていた。「自分がされて嫌なことを人にしないという言葉は、突き詰めると人を傷つける」と指摘。「自分の権利は守られているが、他者の権利は守られていない。その人がやられて嫌なことをしないのが人権という。」

この記事を見て、車いすの井上康さんのことを思い出した。ある会合で、彼は次のように発言した。

「豊中、とっても人間臭いなあと思う。ある意味、逆風が吹いていると感じる中で、『共に生きることの大事さ』を伝えていくことは並大抵のことではない。先週、グループホーム建設反対

の人たちが多く占める地域説明会（行政主催）に行ってきました。当事者はボクを含めてもう一人いました。障害当事者がいないときに比べて、やさしくやわらかい口調で発言しておられましたが、その言葉の裏には『障害者排除』の思想がぎっしりと漂っていました。『共に学ぶ』が40年間根付いてきた豊中ですが、そんな状況です。ボク、20年間豊中を歩き回ってきました。だけど今、ホンマに『コワイ!』と感じています。大げさではありません。その説明会のあと、しばらく引きこもり状態になりたかったです。『ゆるい!』というのは、何も言葉だけじゃないと思います。社会の常識を考え直して、どうやったら自分が、自分たちが生きやすく、どうやったら気持ちよく生きていけるか、それが『ゆるさ』だと思います。だけど、その『ゆるさ』が否定されようとしています。本当に、ボク、『危機や!』と思っています。『こわいです!この豊中でさえ!』

今、自分がやらねばならないことがはっきりとつけつけられている。

## 報告③

## 「私たちの部落問題」

重本 洋輔【事務局】

6月25日、東京都千代田区にある上智大学にて、立場の心理学～マジョリティの特権を考える～公開授業

「Lecture & TalkEvent 私たちの部落問題」がおこなわれた。

この授業は2部構成で、第1部は、



川口泰司さん

(2017.5.10 人権文化のまちづくり講座にて)

家族社会学の観点から、部落出身者が受ける「結婚差別」について、さらに結婚してからも続く「結婚後差別」について研究されている齋藤直子さん(大阪市立大学特任准教授)と、全国各地で部落差別をなくしていくための啓発活動や部落差別解消法の周知活動に取り組んでいる川口泰司さん(山口県人権啓発センター)による部落問題についての公演、第2部は、若者と部落問題について研究されている内田龍史さん(尚絅学院大学准教授)を進行役とした出演者6名によるトークイベントといった内容である。

僕が会場に到着した時には、200人は軽く入れそうな広い教室がほぼ満員となっており、上智大学の学生と思われる若者だけでなく、僕と同年代の方や年配の方など(大学生=若者とは限らないが)、大学外からの参加者も多かったように思う。

第1部では、まず齋藤直子さんから、「初めての部落問題」と題して、“部落問題が入門書などでさえ端的に説明し

きていないほど複雑な問題である”ということや、「部落の人は怖い」「家柄や血筋が違う」「いつも特別扱いされている」といった“重層的なマイナスイメージ”により“人によってそれぞれ差別の理由が異なる”ことなどについての解説があり、続いて川口泰司さんからは「ネットと部落問題」と題し、“今、インターネットを通じて部落差別が深刻化”してきており、“様々な差別情報とともに差別を正当化するような論理が拡散されている”こと、“確信犯的、扇動的、攻撃的な差別者の出現によって人権規範が低下し、現実社会にも影響がでてきている”こと、“そうした差別状況を背景に「部落差別解消法」が誕生したことについての報告があった。

2人のお話は、部落問題についてよく知らないといった人を対象としており、短い時間ではあったものの、部落問題がどういったもので、どういった人たちがどういった差別を受けているのか、現在どんな状況にあるのかなど、部落問題の特徴的な部分や現状と課題について簡潔に知ることができる内容だったと思う。

第2部のトークイベント「私と部落と反差別」では、部落出身の若者や在日コリアンの方、所用で途中からの合流となったゲストコメンテーターの香山リカさん(精神科医)を含めた出演者6名から、自らの部落問題との出会いや被差別体験、部落問題についての思いや考え、現在の差別状況に対する

# 新聞切り抜き帖

## 小池東京都知事の追悼文取りやめはヘイトの容認である!

重本 洋輔【事務局】

1923年(大正12年)に発生した関東大震災から94年目をむかえた今年、東京都の小池百合子知事が、これまで慣例だった朝鮮人犠牲者追悼式への追悼文の送付を取りやめた。この追悼式は、関東大震災直後におこったデマや流言、差別意識による大規模なヘイトクライム、いわゆる「関東大震災における朝鮮人虐殺事件」の犠牲者を追悼する目的で毎年おこなわれ、追悼文についても1970年代から出されてきたそう。近いところでいうと石原さん、猪瀬さん、舛添さんなども送付してきており、小池知事も昨年は送付している。

取りやめる理由について小池知事は、9月1日実施の秋季慰霊大法要(東京都慰霊協会主催)で「関東大震災の全ての犠牲者への追悼をおこなっていききたい」からとしている。つまり小池知事は、地震によって命を失った人も虐殺された朝鮮人犠牲者も同じ関東大震災という自然災害によって命を落とした犠牲者という認識で追悼しようというわけだ。一見、中立的で

公平に思えるかもしれないが、実際は中立でも公平でもない。

さらに小池知事は、虐殺そのものについても「あったかどうかについて様々な見解がある」としているが、当時の著名人による目撃談や虐殺があったことを裏付ける資料が存在している

朝鮮人追悼文見送り 波紋

「小池知事、説明不足」の声

都「前から検討」/ 開催側「修正主義の潮流」

9月1日毎日新聞

ところが、今年2月の高知県安芸市での春季キャンプの途中で、突然頭痛を訴えて帰阪してから、そのあとしばらくは音沙汰なしで、失踪したのではないかなど根も葉もないうわさが、ネット上を騒がせたりもしました。

けれども、阪神球団は9月3日に、横田選手が脳腫瘍のため入院、治療していたことを発表しました。医師から寛解の診断を受け、前日に兵庫県西宮市の選手寮に戻りました。今後は来春のキャンプ合流を目指し、リハビリに励んでいくとのことでした。

横田選手は選手寮で取材に応じ、「数カ月にわたる苦しい治療を乗り越えて、復帰できるまで回復したことを本当にうれしく思っています。これからの野球人生が、同じ病気を持つ人たちに夢、感動を与えられるよう、頑張っていきます」と話したそうです。

また、金本知憲監督も同日、「まずはひと安心というのが、正直なところですね。ここからは時間がかかるだろうけど、復帰に向けて、横田も地道にがんばってくれると思います」とコメントしています。



全面復帰できるまでは、まだ相当時間がかかりそうですが、きっとまた活躍する姿を見せてくれると期待しています。

プロ野球選手といえば、頑強な肉体の持ち主で、健康そのものというイメージがありますが、他にも、元阪神で現在は広島カープの赤松真人選手が、胃がんであることを公表しています。身体が資本であるだけに、病気は人一倍切実な問題となることでしょう。けれども、病気に負けずがんばっている彼らの姿は、私たちに勇気と希望を与えてくれます。

これからも陰ながら応援していこうと思います。病気に負けるな！がんばれ！！横田慎太郎選手！！

## リバティおおさか裁判第11回口頭弁論

12月1日（金）11時～ 大阪地方裁判所

10時30分から傍聴券の抽選があります。

裁判の詳細については「リバティおおさか裁判を支援する会」のフェイスブックをご覧ください。

<https://www.facebook.com/support.libertyosaka/>

自分なりの反差別行動（カウンター行動）について話を聞くことができた。同じ部落出身者であっても、年代や育った環境によって部落問題に対する捉え方も違うし、僕のように子どもの頃から学校で同和教育を学び、放課後はいわゆる「部落解放子ども会」の活動などに参加していた人もいれば、学校で同和教育を受けた経験のない人や大人になってから知ったという人もいる。これまでに直接差別を受けた経験を持つ人もいれば経験のない人もいる。時間の関係で1人ひとりから詳しい話を聞くことはできなかったが、部落出身者や在日コリアンの中にも、いろんな人たちがいるということに参加者が知る機会になったと思う。僕自身も「自分と一緒にやな」「ここは自分と違うなあ」と、自分の過去の体験などと照らし合わせながら話を聞くことができた。

実は授業開始直後に「招かれざる客」

## 理事のページ

## 景観論争の皮肉

桑高 喜秋【理事】

ぼくが豊中から箕面の山すそに引越してかれこれ20年がたつ。千里ニュータウンが建設されたころ、豊中は全国有数の「高級住宅地」としてものではやされ、ローソンの一号店を皮切りに名だたる飲食店や流通業者がこぞってアンテナショップを開店させた

ものである。そのころ箕面はといえば「滝と紅葉とサルの名所」でしかなかった。あれから半世紀。いまや豊中の「お株」は完全に箕面に取って代わられた。171号線沿いには欧米の高級外車の販売店が目白押し、ダイハツやスズキの看板はほとんど見たことがない。



とはいえぼくがこの土地を選んだのはそれが理由ではない。第一、引っ越した当時は山麓線にやっとバス道が開かれたばかりで、サルはもとよりイノシシやシカ、タヌキにキツネ、イタチといった野生動物がハバをきかせていたところのことである。ぼくがこの土地を選んだ理由はただひとつ、見晴らしがよいという点である。天気の良いれば紀伊半島から淡路島まで一望にできるし、とりわけ神戸・大阪の夜景がすばらしいのである。

その景観を売り物にして、20階建ての高層マンションの建設計画が持ち上がった。15年ほど前のことである。

箕面の山を借景にしてきた周辺住民から激しい反対運動が巻き起こった。「山の景観が台無しになる」というのが主張であった。ぼくも署名を求められたが、お断りした。例えば豊中に住む人間にとって、たしかに北に連なる箕面連山は心を癒してくれる大切な存在である。それは箕面に住むぼくらにとっても同様である。しかし、ぼくらの住む建物自体がその山を削って建てられた代物であることを考えると、新

しいマンションの建設に反対するのはあまりに身勝手な気がしたからである。

反対運動は5～6年続いた。行き詰った建設業者が土地を転売したところで計画は頓挫したと思われたが、新しい業者が計画を一部変更しただけで、反対を押し切って建ててしまった。

このマンションの下にも大小のマンションや戸建て住宅が軒を連ねているのだが、新しいマンションは頭抜けて高い。阪急電車の淀川の鉄橋からものはっきり見えるほどである。なるほど山と肩を並べるほど高い。

4年前の夏、そのマンションが水害に遭った。大雨で裏山が崩れて大量の土砂が玄関ホールになだれ込んだのである。下の地域の住民が被害をまぬかれたのは、皮肉にも、反対を押し切って建てられたこのマンションが防波堤になってくれたからであった。それを知ってか知らでか、土砂を取り除く作業を率先して手伝ったのが下の地域の消防団員だったというのも、皮肉といえば皮肉である。

いやいや最大の皮肉は、自然災害が



地域の人間同士のわだかまりを洗い流してくれたことかもしれない。

何を隠そう、その時初めてこの地域が「土砂災害危険地域」に指定されていることを知った。うかつな話である。毎年どこかで大きな災害に見舞われ

る昨今である。明日は我が身。日頃から防災の心構えが必要であるのは言うまでもないが、災害が起こった時に頼りになるのは地域の支え合いである。差別を乗り越えた人間関係を主体的につくりあげておきたい。

## 楽遊ガイド

## 病気に打ち勝て！！

## 阪神タイガース 横田慎

## 太郎選手！！！！

玉置 好徳【理事】

皆様ご無沙汰しております。

季節の変わり目ですが、お変わりございませんか。さて、本誌ですが、前号から誌面を一新しております、それにふさわしい内容のコラムを書かなければと、かなりのプレッシャーを感じております（汗）

ところで、わが愛する阪神タイガースは、現在セントラルリーグ2位を走っています。

優勝は首位の広島カープに一步及びませんでした。昨年は4位で、パシフィックリーグの優勝チームと日本一を争う日本シリーズ進出をかけた、クライマックスシリーズに出場できなかったことを思えば、大きな進歩ではないかと思えます。

その要因としては、中谷将大選手や、大山悠輔選手らの若手選手たちの台頭があげられます。

ところが、その顔ぶれの中に、久しく顔が見られなかった選手が一人います。それが、今回ご紹介する横田慎太郎選手です。

横田選手は、1995年生まれの現在22歳で、2013年ドラフト会議で阪神タイガースから2巡目指名を受けて入団しました。

ちなみに、彼のお父さんは、元ロッテオリオンズ（現・千葉ロッテマリーンズ）などで、俊足巧打の外野手として活躍した横田真之<sup>まさし</sup>さんと、まさに父子鷹といえます。

2016年には、中日ドラゴンズとの開幕戦で、2番・センターでスターティングメンバーとして出場して、日本野球機構（NPB）で5組目の「親子選手による一軍開幕戦スタメン出場」を果たすなど、順風満帆の選手生活を送っていました。